

## 研修医・指導医リレーエッセー<sup>②⑧</sup>



# 初期研修を終えて20年、受け継がれる「教え」のバトン

倉敷中央病院 救急科・医師教育研修部長 越後谷良介



初期研修を終えて20年が経った。大学時代まで関東で育った私は京都に憧れ、研修先に京都の病院を選んだ。引っ越しの荷物が新居（レジデント寮）に届かず、京都での新生活で最初に買ったものが自転車と寝袋だったことは、今では良い思い出だ。がらんとした部屋に寝袋を広げ、一人横になり天井を見つめる。季節はもう春だというのに、京都特有の底冷えが身に染みだ。あの時感じた冷たさと静寂は、これから始まる未知の生活への、期待と不安そのものだったのかもしれない。

研修が始まると、日々は瞬く間に過ぎていった。朝6時の病棟採血に始まり、多忙な指導医への「報連相」を合間に挟みつつ診療に当たる。日付が変わる頃によくカルテを書き終え、病院を後にする毎日だった。若さゆえの体力、当時の時代背景、そして何より切磋琢磨した同期の存在があったからこそ、あの過酷な日々を乗り切れたのだと思う。ただ、それほど多忙を極めていても、京都の街を観光し、同期と酒を酌み交わす時間は不思議と確保できていた。

2年間の研修を終え、16人いた同期のうち、3年日以降も病院に残るのは私を含めてわずか3人だった。その際、当時の院長が贈ってくれた言葉が今も胸に残っている。

「専門医プログラムとして当院に残ってほしい気持ちはもちろんある。だが、他の施設へ移ったとしても、当院で学んだことを患者さんのために生かしてほしい。『あの病院で研修を受けた医師は頼りになる』と言ってもらえることこそが、我々が君たちを教育した証なのだから。ここで得た学びを、ぜひ全国へ広めてほしい」。

一字一句正確ではないかもしれないが、このような内容だった。当時、指導医から受けた教育の恩を、その先生方に直接返すことはもはや叶わない。しかし、自分が受けた教育を（形は今の時代に合わせて変えつつも）後輩たちへ伝えていくことこそが、最大の恩返しになると信じている。

デジタルネイティブ世代の皆さんと私とでは、知識の獲得方法も整理の仕方も異なるだろう。必要とされる情報量は爆発的に増えたが、AIの活用により情報の使い道も多種多様になった。かつては1本の英語論文を読み、要旨をメモにまとめるだけで最低1時間は要したが、今やそれは数分で完了する。「図書館へ行かずとも、ネットで論文を検索してプリントアウトできる」という当時の驚きにも似た感覚を、今のDXの進歩に覚えている。

効率化によって生み出された時間は、業務中であれば患者さんの傍に寄り添う時間に、プライベートであれば自分自身や大切な人を慈しむ時間にあててほしい。どんなに忙しくても、自分自身を見失ってはいけない。「自分が幸せでなければ、患者さんを幸せにすることはできない」——これもまた、ある指導医から授かった言葉だ。

自分自身を見失うことなく、これまで学んできたことを次世代へ繋いでいく。それが、今の私の役目であると考えている。

研修医の皆さん。今は多くの患者さんや先輩から、貪欲に多くのことを学んでほしい。学びを与えてくれるのは、決して指導医だけではない。そしていつか皆さんが指導する立場になったとき、その学びを後輩へと伝えてほしい。自分自身の幸せも、大切にしながら。